

令和元年6月14日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13174

研究課題名（和文）映画が辿る認知症介護の45年間 1973～2017

研究課題名（英文）The Depiction of Alzheimer's Patients/Carers in Japanese Films since 1973

研究代表者

今泉 容子（IMA-IZUMI, yoko）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40151667

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は、日本映画が辿る認知症の表象史を構築したことである。日本映画に描き出された認知症患者とその介護をめぐる家族像・社会像を検出し、外国映画におけるそれと比較しながら認知症映画の最先進国である日本映画の独特な認知症の表象を浮き彫りにしたことであった。

日本映画における患者像と介護者像は多種多様に変貌してきたが、日本映画をモデルにした中国映画は『恍惚の人』のパターン（患者は高齢者、介護者は娘）を継承して今日に至ったことを解明できた。さらにアメリカやイギリスなど、夫婦という家族単位が機能している文化圏では、認知症患者は老いた配偶者に委ねられ、老々介護の形態をとりやすいことも解明できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、まだ認知度が低い認知症映画を、映画におけるひとつのジャンルと捉え、日本映画の認知症表象の変化を1973年から2012年までの40年間にわたって解明できたことである。さらに、日本が認知症映画の分野において、ほかの国々よりも約30年も早くスタートを切ったことが、日本の認知症映画がユニークな特徴を形成してきたばかりでなく、外国映画の認知症の描写に影響を与えてきたことを明らかにできたことも、大きな意義がある。

また、本研究の成果を一般市民に向けて連続講義したことによって、認知症にたいする人々の理解を深めることができ、社会的にも意義のある研究になったはずである。

研究成果の概要（英文）：

This study explored the changes in depiction of the Alzheimer's patients and their carers in Japanese films since 1973, the year when the world's first Alzheimer film was produced in Japan. In the earlier stage in Japanese Alzheimer films, the patients were usually male and their carers were invariably the daughters-in-law. But the change occurred in the late 1980s, and it has become common since then to focus on aged female Alzheimer's patients in Japanese films. The role to care for such protagonists is no longer limited to their daughters-in-law but is also allotted to other family members such as their aged husbands, daughters, and sons.

The genre of Alzheimer films became active in the 2000s in overseas films, particularly in Chinese, Indian, American, and British films. In these countries the pairing of patients and carers does not vary as widely as in Japan, and a comparative study has brought the uniqueness of Japanese Alzheimer films into clear view.

研究分野：映画研究

キーワード：日本映画 外国映画 認知症 患者 介護者 1973年 高齢者 ジェンダー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知症映画は日本が世界に先駆けて 1973 年に制作をはじめたことが、事実として知られていた。その映画作品第一号は『恍惚の人』であった。しかし、日本の認知症映画の研究も、約 30 年遅れて 2000 年代に開花した外国の認知症映画の研究も、本格的になされたことがなかった。

本研究はそうした映画研究の隙間に着眼し、認知症映画をひとつのジャンルと捉えたうえで、日本映画における認知症患者の描かれかたを分析し、患者とその介護者の人間関係の変化を 1973 年(認知症映画のはじまり)から今日まで辿りながら、その変化の意味を解明しようと構想された。また、外国映画に 30 年も先駆けて開花した日本の認知症映画が、外国映画にどのような影響を与えたかを明らかにし、日本の認知症表象の独自性を明らかにしようと考えた。そのため日本映画と外国映画における認知症の描かれかたの比較(共通点と相違点を分析すること)を研究のパースペクティブに入れようとした。

2. 研究の目的

本研究「映画が辿る認知症介護の 45 年間 1973~2017」の目的は、日本映画が辿る認知症表象の変遷を本格的に研究することである。具体的に言えば、日本の 40 年にわたるアルツハイマー映画における患者と介護者の関係や彼らを取り巻く社会環境の変遷を体系化し、アルツハイマー映像表象史を構築することが、本研究の第一の目的である。さらに第二の研究目的として、2000 年代に興隆した外国の認知症映画にも目を向け、日本と外国のアルツハイマー映像表象を比較考察することを設定した。

認知症をテーマにして、日本映画と外国映画における認知症患者・介護者の人物造形や彼らを取り巻く社会環境を検証することは、国内外でいまだ試みられていない。本格的な研究対象になったことのない認知症映画に初めてスポットライトを当て、日本映画における認知症表象を解明するところに、本研究の斬新さがあると言える。

3. 研究の方法

2 年計画(のちに 3 年計画に切り替えられた)の本研究の初年度は、まず日本のアルツハイマー映画でまだ収集できていない作品を収集することから開始された。多数の映画作品を入手したあと、その 1 本ずつにショット分析をほどこしながら、データ検出を行う計画を立てた。データとして検出した内容は、映画における認知症患者と介護者がどのような人間関係(家族関係)にあるか、その人間関係は一篇の映画のなかでどのように変化しているか、その関係は日本映画全体のなかで、時代が下るにつれてどのように変化してきたか、ということであった。

そうしたデータ検出は、日本の認知症映画だけでなく、外国の認知症映画をも対象として行った。本研究の主眼は、日本の認知症映画における患者像と介護者像の変遷であったが、その独自性を明らかにするためには、外国の認知症映画の状況も比較対象として分析する必要があると考えたからである。

データ検出が終わった段階で、患者像・介護者像の変化とその要因(理由)の考察を行った。ただ、ここでひとつ、計画していた 2 年間よりも長い時間を要する問題が出てきた。それは、中国映画の認知症表象に関する問題点であった。外国における認知症映画は、1973 年に開始された日本の場合と異なって、約 30 年遅れて 2000 年代に入ってから開始されたのであったが、中国映画だけは例外で、1995 年という早い時期に、『恍惚の人』に酷似したアン・リー監督の『女人、四十』に認知症のテーマが出現した。これはアン・リー監督が日本人を母に持ち、『恍惚の人』が公開された時期に母といっしょに日本を訪れていたことと無関係ではない、と考えていたのであるが、それ以上に中国映画の認知症表象の流れが、ほかの外国映画における認知症の描かれかたと明確に異なることを突き止めた。そのため、外国映画のなかでもとくに中国映画における認知症表象の解明に力を入れ、日中の認知症表象の比較考察を行うという新たな小テーマを設定し、その解明に時間をかけた。そのため、当初の計画より一年長い研究時間が必要になったのであった。

4. 研究成果

本研究によって、日本映画における認知症表象の 1973 年から 2012 年の 40 年間の変遷を表象史として解明できたことが、一番の成果である。

その変貌の要点を述べると、つぎのようになろう。1973 年のエポックメイキング的映画である『恍惚の人』では、患者は高齢の「男」であり、彼を介護する者は「女」(義理の娘)であった。しかし 1980 年代の終わりに大きな変化が起こったことが突き止められた。大きな変化とは、患者が高齢の「男」から「女」に変化し、介護者が「女」から「男」に変化する、という男・女の逆転のことである。1985 年制作の『花いちもんめ』には、まだ高齢の父を義理の娘が介護するという初期の人間関係が見られるが、1986 年の『人間の約束』や 1995 年の『午後の遺言状』になると、患者は高齢の「女」に変化し、介護者は女(娘)ではなく、男(夫)に変わ

っていることがわかる。ジェンダー論は、アルツハイマー表象の考察には欠かせない。こうしたジェンダーの逆転のほか、介護者がもはや子ではなく、患者の配偶者になっていることも明らかになった。すなわち、老々介護という患者・介護者の人間関係が浮上してきたのである。2000年代になると、介護者像はさらに変化し、患者の9割が「高齢の女」のままであるにもかかわらず、介護者は男と女が同等に登場するようになり、ふたたび子世代にもどるのである。つまり、介護者は息子が娘となり、老々介護は影をひそめるようになったのである。息子・娘は、実の子であったり、義理の子であったり、映画ごとに異なるが、子であることには変わらない。すなわち、認知症患者の介護に関して、少なくとも映画の領域では、老々介護のまま放置されることなく、子世代が積極的に支援の手を差し伸べ、親の世話をするという明るい未来が描き出されているのである。(若年性認知症のケースは、ごくわずかだが日本映画と韓国映画に出現しているが、表象史という大きな流れを構築するさいには、希少すぎて考慮するにはいたらなかった。)

このような日本映画の認知症表象史の独自性を明らかにするために、外国映画のそれとの比較考察を行ったのであるが、外国の認知症映画は、ひとことで言えば、暗い未来を描き出している。ほとんどが老々介護の形をとっており、しかも患者は妻であり、夫が彼女を介護するのである。夫婦が社会の単位として確立され、そこに息子家族や娘家族が入ってこないアメリカやイギリスなどでは、映画においても夫婦だけで認知症介護のケアをせざるをえない状況が描き出されている点が明らかにできた。ただし、中国映画では事情が異なることも、明らかになった。日本映画をモデルとして出発した中国映画の認知症表象は、時代が下っても、高齢の親介護を子が行うという人間関係が今日まで引き継がれているのである。日本映画のような変遷をたどることなく、老々介護の描写を提示することなく、淡々と高齢の親とそれを介護する子の関係(葛藤)を描き出す中国映画に関しては、本研究のパースペクティブをこえた社会的背景の研究が必要であることを実感した。

以上のように、日本映画の認知症表象史を構築し、外国(アメリカ、イギリス、カナダ、中国、韓国、インド)の映画における認知症の描かれかたと比較考察したことが、主たる研究成果であった。

上記の成果のほかに、第二、第三の成果としてつぎの2点を挙げることができよう。

第二の成果として、市民への貢献が挙げられる。本研究の成果を筑波大学サテライトオフィス活性化プロジェクトとして、つくばセンターにある筑波大学の市民開放型講義室(サテライトオフィス)にて一般市民へ向けて講義し、認知症に関する問題点をいっしょに考えた。この講義は、一回限りのものではなく、20回の連続講義として提供したため、多くの市民(延べ312名)の参加があり、本研究の成果として特記できるものである。

第三の成果として、老年学への貢献が挙げられる。本研究は映画研究であっても、高齢者医療や認知症というテーマを研究対象とするため、医学、生物学、社会学、福祉学、心理学などが協力し合った学際的研究領域である「老年学」に参加できる可能性をもつ。映画研究はこれまで老年学に参加した実績がなく、契機もなかった。しかし老年学のなかで重要なテーマのひとつとなっている認知症は、映画表象の考察を抜きにしては片手落ちと言えるほど、日本で意欲的に映画関係者たちが取り組んできたものである。本研究は認知症を切り口にして、老年学に参加できる映画研究を提案するモデルケースとして、今後、機能するはずである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

Yoko Ima-Izumi. "Meaningful Differences in Cross-Cultural Films." The Seventeenth Hawaii International Conference on Arts and Humanities, January 12, 2019, Sea Pearl 1, Sheraton Waikiki, Honolulu, Hawaii, U.S.A.

Yoko Ima-Izumi. "The Use of Films in the Educational Scene." The Seventeenth Hawaii International Conference on Education, January 7, 2019, Sea Pearl 1, Sheraton Waikiki, Honolulu, Hawaii, U.S.A.

Yoko Ima-Izumi. "Threats to Life from Godzilla to AIDS." The Sixteenth Hawaii International Conference on Education, January 6, 2018, Iolani 7, Sheraton Waikiki, Honolulu, Hawaii, U.S.A.

Yoko Ima-Izumi. "The Search for Self-Identity in Cross-Cultural Films." The Fifteenth Hawaii International Conference on Arts and Humanities, January 11, 2017, Sea Pearl 3, Sheraton Waikiki, Honolulu, Hawaii, U.S.A.

Yoko Ima-Izumi. "Different Cultures, Different Views." The Fifteenth Hawaii

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

今泉容子、「異なる<文化>どうしの交流」、今泉容子監修『映画を通じた異文化理解』(筑波大学サテライトオフィス活性化プロジェクト講義集、2018年)に掲載、1 - 22頁。

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。